

# 沖繩

## ——島々の神 (2)

高橋 六二

※ これは前稿（本学紀要第三十二集、平成八年刊）に続くものである。座間味島・粟国島・久高島を取り上げることとした。

### 三、座間味島

1、仲御嶽

(座間味村)

神名、ヨキゲライ

神名、クセツキヨ

(同村)

2、大御嶽

(同村)

神名、ミウキヤサ

7、仏峰御イベノ前  
神名不レ伝。

(同村)

3、小御嶽

(同村)

神名、アフエキヨ

8、外之トノ

(同村)

4、赤崎御嶽

(同村)

神名、ヨキナワ

9、内ノトノ

(同村)

主取、地頭代

主取、首里大屋子

10、サウズノトノ

(阿真村)

17、奥ノ大地御嶽  
神名、ヤイキヤサ

(同村)

主取、大掟

11、シンマノトノ

(同村)

18、同クハゼ御嶽  
神名、オシカケ

(同村)

根人、シンマノヲヒヤ

12、アサトノ

(阿佐村)

根人、アサノヲ比屋

19、慶留真御嶽  
神名、ミヨコム  
右七嶽、由来不レ伝。

(同村)

13、スキキヨ御嶽

(阿嘉村)

神名、トモヨセ

20、富里ノトノ  
主取根人、上地ノヲヒヤ

(同村)

14、仲森御嶽

(同村)

神名、ヨキヤアガリ

21、下ノトノ  
主取根人、下ノヲヒヤ

(同村)

15、コバウ御嶽

(同村)

神名、モチヅキ

22、上ノトノ  
主取根人、ゲルマシ

(慶留真村)

16、久場島御嶽

(同村)

神名、クセツキヨ

23、下ノトノ  
主取根人、下ゴヲリ

(同村)

座間味島の聖地は、『琉球国由来記』各処祭祀の項では御嶽とトノとに分けられている。そして神名は御嶽にのみ記されている。しかし御嶽の由来はすべて不伝とあるから、それぞれの御嶽と神との関係も不明である。それでも『琉球国由来記』年中祭祀の項によれば、九所ノトノ（8〜12・20〜23）では毎年、麦ノ穂御祭・稲ノ穂御祭・稲ノ大御祭が行われ、別に11・12では秋の走渡唐船の時の祭りも行われ、7はアブシ払・麦初種子ミヤ種子の、18を除くすべての御嶽は八月柴挿の日のアブシ払結願の、御タカベ所となっているから、祭祀との関わり的一面は想像できる。

1のヨキゲライは、ヨキは雪で米の美称、ゲライはオモロ語のゲラヘだとすればやはり美称辞で、つまりりっぱな米の意であろう。それを神格化したのがこのヨキゲライだと考えられる。『おもろさうし』卷十二―六七二に「よきけらへ よきのめつらしや」などがある。2のミウキヤサは不明、3のアフェキヨもキヨは人のことだろうが他は不明。4のヨキナワは沖縄で、『おもろさうし』には神女名として散見する。5のマシラジはマは美称、シラジは御嶽名のシラシと関係するだろうか。シラシは「知らす」だとすると神託のあった御嶽のようだ。『おもろさうし』卷十五―一二二には「しらし おてやちよも」とあり、この「しらし」は読谷村座喜味の御嶽だとされる。6のクセツキヨは、クセがオモロ語の「くせ」だとすると鳥の羽、または美しいの意で、キヨはやはり人であろうか。しかしツ

が決まらない。『おもろさうし』卷十二―七〇五には「はねさしやりくせさしやり」、卷五―二二二には「くせせりきよ たかへて」などとある。あるいはツキヨは月夜で、つまり美しい月夜という名の神女であろうか。

13のトモヨセはオモロ語では倉の意らしい。『おもろさうし』卷九―四八一に「やそくらのともよせ」などがある。現在では地名・姓名に友寄というのがある。14のヨキヤアガリはヨキは雪、ヤは助詞、アガリは美称辞か。『おもろさうし』卷二―五一の「よきやのろ」、卷一―四一の「ゆきあかり」などは神女名とされるが、こうしたものと一類の呼称であろう。また卷二十一―三三六の「よきあかり」は、『琉球国由来記』各処祭祀の摩文仁間切波比良村（糸満市南波平）波比良城ノ嶽の神名ヨナウシユキヤガリノ御イベ、のユキヤガリだとされる。ヨキヤアガリもこのヨキアカリ・ユキヤガリの神と同類に考えることができるだろう。15のモチツキは望月、つまり十五夜の月のことだが、『おもろさうし』卷二―五〇に「もちつき あすはす」などとあってやはり神女名なのだろう。16のクセツキヨは6の場合と同じである。17のヤイキヤサはキヤサの部分か2の場合と同じであるが、キヤサはカサの訛音であろうか。『おもろさうし』卷十三―八五四に「くにかさのおやのろ」などとあるクニカサは久高島ではクニチャサと言われる。これと同類だとすればヤイキヤサは八重笠の意の神女名だろうか。18のオシカケは、『おもろさうし』卷十二―六六一に「おしかけは そへて」などとあるのと同様、やはり

神女名であろう。19のミヨコムは不明。

以上、座間味島の神名は由来が伝わらないからその性格は不明ながら、『おもろさうし』の用語、特に神女名に類似する呼称が多いということはいえる。なお8〜12・20〜23は殿の管理者といった性格のものであろうから、この場合は除外しておく。

ところで『座間味村史』下・資料編には明治四十二（一九〇九）年の史料『琉球国慶良間島座間味邑歴史』が収録されており、それには「一、始祖来島ノ節出現守護セシ諸神ノ御名」という項がある。南宋淳熙年間（一一七四〜一一八九年）に大里天孫氏第三王子勝連王子が西河山に逃げる時、四十三神が出現して守護したという内容である。その列挙された神名をいまの場合に当てはめると、

- |   |       |    |        |
|---|-------|----|--------|
| 1 | 雪儀来神  | 13 | 友吉神    |
| 2 | 妙奇屋佐神 | 14 | 雪屋揚神   |
| 3 |       | 15 | 餅月神    |
| 4 | 雪繩神   | 16 | 姑節奇由神  |
| 5 | 真白字神  | 17 | 八重奇耶佐神 |
| 6 | 姑節奇由神 | 18 | 推懸神    |
| 7 | 仏峰神   | 19 | 妙汲ハ神   |

となる。また「一、拝所ノ名称及ビ司サノ神名」にもほぼ同様にあり、3は葵奇由となっている。そしてこれらが「司サノ神名」となっているのが注目される。つまり座間味島の神名はツカサの神職名でもあつたらしく、これが『おもろさうし』の神女名と類似のものが

多かつた理由だったのである。「一、諸神出現シ国作ヲ護衛セシ事故」には「夫レ諸神託遊スルコト必ズ婦女ニ係ル故ニ国人亦此ヲ尊ンデ女君神ト云フ」ともある。

#### 四、粟国島

1、ガダノコ御嶽  
神名、コバモリツカサ

2、八重ノ御イベ（八重ノ御嶽）

神名、マキヨツカサ

3、テラチ御嶽

神名、目眉清良ツカサ

4、ヲコノ御嶽

神名、テヨイコモラジ

5、同中ノ御嶽

神名、若ツカサ

6、同ハイノ御嶽

神名、タケノコモラジ

7、シマイ御嶽

神名、アカラツカサ

8、アラバ御嶽

神名、ミモノキヨラツカサ

9、ヤカン御嶽

神名、ケモ、ツカサ

右九嶽、由来不レ伝。

粟国島の場合も由来が伝わらず、それぞれの御嶽と神との関係は不明である。『琉球国由来記』年中祭祀の項には、「二月ニ長月ノ御タカベ」がノロ火神と1・2で、「三月八月四度四品御物参」がノロ火神と九嶽すべてで、五月朔日の帰唐船の祈願がノロ火神と1・2で、七月の島ナフシが1で、それぞれなされるとある。また六月のヤカン祭は八重ノトノでなされるらしいが、その時の「コネリ御唄」に「……ガダノコノ御前、コバモリノ御前カラ、イシ使ヘメシヤワレ。タマツカヘメシヤワレ……」などとあるのは1のことを言っているとみられる。

1は古く重視された御嶽であることが知られるが、それがなぜかはわからない。コバモリツカサは蒲葵森の司の意であろう。蒲葵は

琉球文化圏で広く神木とされ、その茂る森は神の聖地とされている。ツカサはその神を祀る神女の職名だが、ここでもそれが神名になっ  
てしまっている。以下、4・6を除いてみなツカサを称しているのが粟国島の神名の特徴である。2のマキヨは古代琉球の集落のことであるから、これも集落を統べるツカサの意であつたのだろう。3の目眉清良ツカサは目・眉で代表させて容貌を誉めた呼称、「目眉清良」は前稿の久米島具志川間切の7、久米仲里間切の6にも見られた。4は6と比べてみるとコモラジが共通しているが、ともに語意は不明である。5は文字どおり若さを、7は赤、つまり明るく美しいさまをいったもので、8はオモロ語では神遊びの時の美しい幡、あるいは美しい神遊びをいうようだから、神遊びのさまを讃えたものだろう。9のケモ、はよくわからない。ケは気、モ、は百で靈力がすぐれているというのだろうか。

『粟国島の民話』によれば、7はシー高い神、8・9は恐ろしい神とされている。その「野やがんういみ厳折目の由来」では島の北海岸近くの野やがんういみ厳というところに8があり、昔、その恐ろしい神が人の鼻を抜いたり、目を悪くさせたり、流産させたりしたという。そこで北山王から派遣された役人と神人がいっしょになってこの神をおびき出し、1の御嶽の後ろあたりを通つて2（八重大中御嶽・イビガナシーとも）まで来ると、神の姿は消えてそこに鎮まった。それからは神も荒れなくなつたが、これが六月二十四・二十五日の野やがんういみ厳折目の始まりだという。

## 五、久高島

### 1、伊敷泊 二御前

(東方へ御拜被レ遊也)

一御前、ギライ大主  
一御前、カナイ真司

### 2、コバウノ森

一御前、コバツカサ  
一御前、ワカツカサ  
一御前、スデツカサ  
一御前、ヤクロ河

此コバウ森、阿摩美久、作り給フト也。詳ニ、中山世鑑ニ見タリ。

(下略)

### 3、中森ノ嶽

神名、キヤノアガリアヲヤハナノ御イベ

右ニ御嶽之由来。年紀者、不ニ相知。諺曰、昔、久高島ニ、アナゴノ子ト、云人アリ。久高島ニ住始タル、根人也。或時、伊敷泊ニ出、詠ニ海原ニ居ケルニ、浜近ク、白壺ニ、浮テ寄ケレバ、取揚ントスレバ、不レ被レ取。帰レ家、女房アナゴ姥ニ、此由語ル。女房答曰、行水シテ、潔レ身、著ニ白衣、往テ可レ取ト云。故、行水シテ、白衣ヲ

着シ、浜へ出、流壺本ニ立寄、袖ヲ攤、スクワントスレバ、波ニヨラレ、輒ク袖ニ乗ル。

ヨルコビテ、取アゲ、我家ニ帰り、壺ノ口ヲ開キ見レバ、麦・粟・黍・扁豆之種子、且、コバ・アザカシキヨノ種子アケル。取出シ、所々へ蒔ケル。生立ヲミレバ、件ノ喰物也。コバ・アザカシキヨハ、二三年ニ生立ケル。随分秘藏シテ、人不ニ踏損ニヤウニ、禁ズル故、コバ高ク秀デ、アザカシキヨ、茂リケル也。其比、君真物出現、度々此山ニ託遊。誠ニ神遊ノ所ト見ヘタリ。念願ヲ祈ケレバ、驗アリ。ソレヨリ、御嶽ヲ崇始ト也。

右壺埋タル所ハ、石積廻シ、今ニ有レ之。掘り出シ見ト望者、一兩人アリテ、歛ヲ打タテケレバ、大風吹、忽ニ病付、為レ死者アリト、申伝也。(下略)

久高島は琉球王府の崇拜も受けて、古来、神の島として崇められてきた所である。現在では一般に七御嶽が特にあつい信仰をうけているが、『琉球国由来記』各処祭祀の項にはこの三ヶ所があげられている。そして由来も有名な五穀の起源譚として記されているから、それぞれの聖地と神との関係もいちおう理解できる。しかし神名とのつながりももうひとつ不明確である。

神名のあげ方が「一御前」と「神名」と二種あるが、その違いはわからない。この形は前稿の久米島の場合にも見られた。1はいわゆるニライカナイの神である。2はコバウ・コバは蒲葵である。だ

からコバツカサは蒲葵を神格化したものであると理解できる。ツカサはすでに見たことであるが、こうした呼称からすると、単に神女職を示すというよりも、カミと同意で用いられた古称なのかもしれない。ワカツカサ・ステツカサはコバツカサを若さ・新しさといった面で言い替えて独立させた神格なのだろうが、実際の祀りかたで見ると、これにたずさわるノ口の違いがある。ヤクロ河が他と異質であり、この由来では明らかでないが、アナゴノ子が行水・潔身したのがここ（現在ではヤグルガーという）だという。聖水あるいはその場が神格化されたわけである。

3は先に見たごとく扱い方が他と異なっている。キヤはオモロ語のキヤ・ケオ（京）であろう。首里城内に「京の内」という聖域があったというが、キヤノは聖域を讚美する表現のひとつとしてここでも用いられたのだろう。アガリは東であり、1の注記にもみられるごとく、東方崇拜のあらわれであろう。アヲヤハナはアヲが青でヤは助詞、ハナは端、つまり東方遙かの青海原のむこうに幻想した神の世界を神格化したものと考えられる。

こうしてみると、久高島の場合は、これまでにみた島々の神とはその捉え方が大きく異なっている感じがする。それは王府の支持を得て神観念が高度に昇華した結果なのかもしれない。